

甲第九四号証



平成四年(5)第五二号

控訴趣意書

被告人 廣野 秀樹

右の者に対する傷害・準強姦被告事件の控訴趣意は左記のとおりである。

平成四年一〇月七日

名古屋高等裁判所

金沢支部 御中

弁護人 木梨 松司




原判決は、次のとおり(1)重大な事実誤認をなしておりその誤認が判決に影響を及ぼすことが明らかである。また(2)懲役四年の実刑は不当に重すぎる。更に(3)被告人は、犯行当時、心神喪失もしくは心神耗弱の状態にあったので原判決の破棄を求める。

第一 事実誤認

原判決は、罪となるべき事実第二において「同女が右傷害により意識もうろうの状態となり抗拒不能であるのに乗じて、同女を姦淫しようと企て(中略)抗拒不能の状態にある同女を姦淫した」旨判示するが、重大な事実誤認であって破棄を免れない。

一 被告人には、次のとおり安藤文が「意識もうろうの状態となり抗拒不能であった」との認識はなく、従って準強姦罪の故意^を欠くものである。

1 被告人は、被害者の身体的状態について、「蹴った後、車の脇に寝かし



たとき少し出血しているのをちらっと見た」「そんなに頑固に血は出ていなかったと思った」「被害者が頭を怪我していたとは全く思っていないでした」(被告人供述調書)と述べているとおり被害者の外見からは、若干出血はしているものの正常な状態であると思っていたこと。

2 被害者の意識状態についても、「最後にもう一度聞くけど本当に車止めとったことないのか」という被告人の問いに「私、そんな覚えはないよ」(平成四年四月一三日付員面調書一七)「何やそれ、知らない」(検面調書五)と返答しており、また、被告人が行為に及ぼうとしたとき「嫌」と三回位言っている(検面調書五)ことから、被告人としては被害者自身意識もしっかりしていると思っていたものであること。

3 さらに、被告人としては、被害者も被告人に好意を持っており性的関係をもてば、二人の意思疎通もスムーズに行くと思っていたこと。

4 したがって、被告人は、被害者が抗拒不能状態にあったとの認識を欠い

ているものである。

二 被告人は捜査段階及び原審において準強姦罪の成立を認めているが、それは次の事由によるものである。

1 被告人には、「準強姦罪」についての知識が全くなかったこと。

2 被害者に重症を負わせたとの自責の念から、真実に反する供述を捜査官になしたものであること。

3 原審の審理では、いわば放心状態が続き、自分の意思に反した審理の進行がなされているのに全く気付かなかったこと。

4 それ故、捜査段階での供述は真実とは異なるものであり、原審で認めているのも被告人の真意ではない。

三 以上より、被告人には抗拒不能に乗じたとの故意が存しないので、準強姦罪については無罪である。

第二 量刑不当

本件につき原判決は被告人に対し懲役四年の実刑判決を言渡したが、以下の情状を斟酌すれば量刑不当と思料されるので、原判決の破棄を求めるものである。

一 被告人は、被害者に暴行を振り、結果的に重大な怪我を負わせたことについて、十分に反省し、自責の念も顕著である。

二 被害者の症状は、現在、リハビリテーションを受ける程度にまで回復している。

三 被告人は、母一人・子一人の家庭環境である。年老いた母を残し、服役するには長期間にすぎ、老母のためにも同情を得たい。

四 被告人は、被害者に対し一生かかっても被害弁償したいとの真摯な気持ちを有しており、そのためにも早く社会に復帰し収入を得る必要がある。

第三 心神喪失・心神耗弱

被告人は本件犯行当時、心神喪失ないし心神耗弱の状態にあったものである。

る。

一 被告人は、被害者に対する恋情のあまり正常な判断能力を失っていたところ、被害者から「交際している男性がいる」等と言われて逆情し、更に、自分自身が追いつめられた気持になり本件行為に及んだものである。

二 被告人の被害者に対する暴行の程度、更に被害者の傷害の程度に気付かないで性行為に及んでいること等は、常軌を逸しているものであり、当時、被告人が理非善悪を弁別する能力を失っていたこともしくは著しく減退していたことを示すものである。